

Diagnostic utility of endobronchial ultrasound with a guide sheath under the computed tomography workstation (ziostation) for small peripheral pulmonary lesions

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2016-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松元, 祐司 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001906

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1763 号

Diagnostic utility of endobronchial ultrasound with a guide sheath under the computed tomography workstation (ziostation) for small peripheral pulmonary lesions

(小型末梢肺病変に対するガイドシース併用気管支腔内超音波断層法における、ワークステーションを用いた仮想気管支鏡の有用性の検討)

松元 祐司 (まつもと ゆうじ)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、小型の末梢肺病変に対する気管支鏡診断における、ワークステーションを用いた仮想気管支鏡の有用性を示したものである。気管支の走行は複雑であり、対象病変に到達するためには正しい道筋を選択する必要があるが、困難な場合が少なくなかった。仮想気管支鏡の導入によりこの難点は克服されつつあるが、仮想気管支鏡の作成には高額な専用機器を要するため、なかなか普及が進んでいないのが現状である。そこで筆者らは、既に多くの領域で臨床応用が進んでいる画像処理ワークステーションに着目した。ワークステーションは様々な画像解析を行う際に必要なため、多列 CT を有するほとんどの施設で導入されており、汎用性および普及性に長けている。筆者らはワークステーションを用いて仮想気管支鏡を作成し、小型の末梢肺病変に対する気管支鏡診断における有用性を後方視的に検討した。ワークステーションを用いた仮想気管支鏡を併用した群と併用しなかった群に分け検査結果を比較検討したところ、併用群では診断率が有意に高く、多変量解析においても仮想気管支鏡の併用が有意な因子として示された。また併用群で病変までの到達度を表す超音波による病変の検出率が有意に高く、正しい道筋案内という仮想気管支鏡に求められる本来の役割を果たしていることが示された。一方、併用群で検査時間は有意に短く、検査による負担を減らせる可能性も示された。総合的に、ワークステーションを用いた仮想気管支鏡は小型の末梢肺病変に対する気管支鏡診断において有用な可能性が示された。真の有用性を示すためには前方視的な検討が必要と考えられるが、ワークステーションを用いた仮想気管支鏡を臨床応用するための端緒となる研究であり、臨床的意義は大きい。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。